

旧岩保木水門

北海道釧路郡釧路町字トリトウシ原野

漠とした広大な原野。繁茂する葦原の上に木造の「小屋」が見える。近付くとその下部には蒼然としたコンクリート製の水門があった。遠望した小屋は、北海道東部、釧路湿原を蛇行する釧路川と、人工河川である新釧路川の分岐点に建造された岩保木水門^{いわぼつき}の上部に設置された上屋だ。内部は2枚の門扉を昇降させる4基の手動巻上機を擁する。しかし、1931（昭和6）年竣工のこの施設は一度も稼動することなくその役割を終えたという。

屈斜路湖^{くつしゃろこ}を水源として釧路市街から太平洋に注ぐ釧路川は、明治の開拓期から日常生活や物流を支える重要な舟運の要路だった。しかし、ひとたび大雨が降ると河口部の市街に洪水をもたらす元凶ともなっていた。そこで延長11kmにも及ぶ人工河川の新釧路川を海に向けて開削。洪水時には分流点の岩保木水門で流路を遮断し、全流量を新釧路川に流下させる計画だった。だが1931（昭和6）年に新釧路川が竣工すると、物流の主要ルートは岩保木水門を通る旧流路ではなく、新水路と、同時期に開通した国鉄釧網線^{せんもう}（現JR釧網本線）に移行してしまう。水門は閉じたまま月日を重ね、新水門^{*}の建設後に旧岩保木水門は閉鎖された。

新釧路川はその土木的価値が認められ（公社）土木学会の選奨土木遺産に認定、岩保木水門も何度か補修されながら貴重な土木遺構として遺された。湿原に佇む木造建築の河川施設。大自然の風雪に耐え続けたその姿には木造建築の強靱さが横溢していた。



「イワボッキ」はアイヌ語で「山の下」を意味する。現在、水門の背後、岩保木山のふもとには JR 釧網本線が走り列車の警笛がのどかに響く。エゾシカやキタキツネがそれに驚くこともなく水門の周辺で遊んでいた。時折、カメラを携えた人が訪れる。岩保木水門はこの地のシンボルとして親しまれている。

※新水門は1985（昭和60）年に着工。竣工は5年後の1990（平成2）年で、老朽化した旧水門に代わり現在も使用されている。

